

「がん緩和ケアについて」

平成 26 年 1 月放送

加藤 泰史

皆さんは、がん緩和ケアというとな何をイメージしますか？終末期医療や看取りをイメージされた方も多いのではないのでしょうか。もちろん、これらも、とても大切な緩和ケアですが、本来は、がんと診断された時から、即ち、早期がんの段階から、必要に応じて、行わなければならない医療行為なのです。今までのがん医療の考え方では、「がんを治す」ことのみに関心が向けられていましたが、最近では、がん患者が抱える「辛さ」にも焦点が当てられるようになりました。

緩和ケアでは、文字通り、辛さの緩和を行うのですが、がん患者が感じる辛さには、どのようなものがあるのでしょうか？がん患者は、体の痛み、息苦しさ、体のだるさ、吐き気など、体で感じる辛さ以外にも、様々な辛さを感じているのです。がんを告げられたその時から、心の不安や苛立ち、がんの治療が始まることで生じる仕事の問題、治療費に関する問題など、数多くの辛さに直面することになるのです。これらの様々な辛さを和らげるのが緩和ケアです。がん診療を行っている医療機関では、医師、看護師、薬剤師、栄養士、臨床心理士、リハビリスタッフ、メディカルソーシャルワーカーなど、多数の職種でチームを組んで、緩和ケアを行っていますので、積極的に利用していただければと思います。

がん患者が持つ辛さの中で、体の痛みに対しては、しばしば医療用麻薬を使用します。麻薬というと「中毒になるのでは？」「頭がおかしくなるのでは？」



「死期を早めるのでは？」などの不安を持つ方も多いのではないのでしょうか。しかし、これらは、すべて誤解です。麻薬は、医師の指導のもと、正しく使用すれば、危険な副作用は非常に少ない薬です。むしろ麻薬を使用することで、体の痛みが和らぎ、体力が回復し、「一旦中断していた抗がん剤の治療が再開できた。」

「仕事への復帰が可能になった。「好きな趣味を楽しむことができるようになった。」といった喜びの声を多数聞くことができます。痛みがある時は、医療者の話をよく聞き、麻薬に対しての正しい理解をしていただきたいと思います。

がん終末期になった時に、どこで療養するかは、とても大切な問題です。最近、在宅医療者のレベルの向上や医療機器の進歩によって、ほとんどの医療行為が在宅でも行えるようになっていきます。介護力の不足を補うための社会的な仕組みも数多くあります。自宅では、患者や家族のペースにあわせた生活を送ることができ、病院では味わうことのできない安らぎを得ることができます。病院の緩和ケアチームは、在宅移行のための支援を行っていますので、積極的に利用していただくことをお勧めします。

国立病院機構福井病院は、がん拠点病院として、「がん相談支援センター」を設けており、がん患者の不安や疑問に対応しております。お気軽にご利用ください。